感染症発生動向調査委員会報告　2月

≪今月のトピックス≫

- **インフルエンザ検出状況は、市内ではすべて新型インフルエンザのみです。**
- **感染性胃腸炎は、緑区、泉区、神奈川区が警報レベルです。**
- **流行性耳下腺炎は、瀬谷区、泉区が注意報レベルです。**
- **麻しんの家族感染と、学級内感染が認められました。全員に予防接種歴が1回もありませんでした。**

平成22年1月25日から2月21日まで（平成22年第4週から第7週まで。ただし、性感染症については平成22年1月分）の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成21年　週－月日対照表	
第4週	1月25～31日
第5週	2月　1～　7日
第6週	2月　8～14日
第7週	2月15～21日

全数把握疾患

＜麻しん＞

2008年1月から感染症法における5類感染症の全数把握の対象となり、診断した医師すべてに届出が義務付けられました。

（国立感染症研究所　HP http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/index.html）

2月は24日現在で11例の届出があり、うち5例はきょうだいであり、5例とも予防接種歴が1回もありませんでした。さらに2例はきょうだいのクラスメイトで、やはり1回も予防接種歴がありませんでした。中学1年、高校3年相当の年齢にMRのⅢ期、Ⅳ期が行われるのは、2008年から2012年までです。ワクチン接種による予防の大切さを周知していく必要があります。

＜急性脳炎＞

1例の届出があり、1月以前の追加届出も4例ありました。新型インフルエンザによるものが2例、迅速診断キットでインフルエンザA型陽性が2例、1例は原因病原体不明です。

＜腸管出血性大腸菌感染症＞

1月の追加届出が2例ありました。2例とも、レバーの生食によるものでした。内臓を含む肉類には充分な加熱が必要です。

一次医療機関の腸管出血性大腸菌感染症の対応については、次をご参考下さい。

（横浜市衛生研究所　HP http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/infc_o157_guide.html）

＜HIV感染症＞

1例の報告がありました。すでにAIDSを発病している状態でした。性感染症は、予防できる疾患です。感染予防が何より大切ですが、仮に感染しても、早い時期に診断できることで、適切な時期に医療が提供でき、パートナーへの感染予防が可能になります。感染予防に加え、検診の機会の周知が必要です。

2月12日に発表された厚生労働省エイズ動向委員会報告によりますと、2009年の年間報告の速報値は、国内で新たに報告されたHIV感染者数は1,008件で過去3位、エイズ発症者数は420件で過去2位であり、双方最高だった平成20年より減少していますが、検査が150,252件と昨年より約27,000件減少、相談件数は193,271件と、約37,000件減少しているので、決して増加に歯止めがかかった状態では無いと思われます。

（エイズ動向委員会報告　http://api-net.jfap.or.jp/mhw/survey/mhw_survey.htm）

定点把握疾患

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点:88か所、内科定点:57か所、眼科定点:18か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計192か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の11感染症を報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計145定点から報告されます。

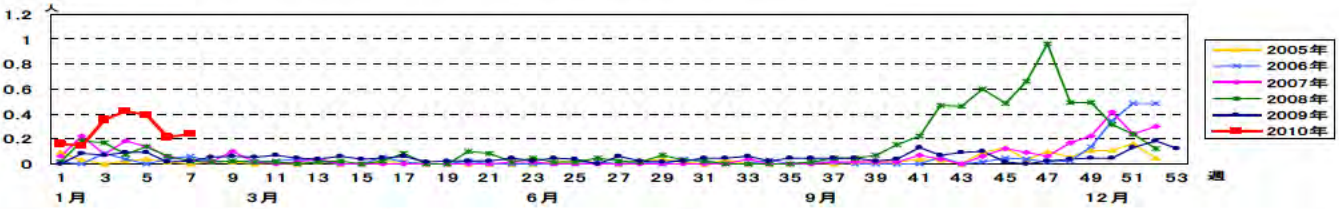
＜インフルエンザ＞

今シーズンは、第44週(39.18)をピークに、漸減し、第7週では1.65まで低下しています。この時期としては、例年に比べると報告数が少なく、過去6年で最少となっています。

市内におけるインフルエンザウイルスの検出状況は、すべて新型インフルエンザのみです。

＜RSウイルス感染症＞

定点当たり0.24と、この時期にしては比較的高く推移しています。届出には、抗原の検出かペア血清での抗体検査が必要ですが、抗原の迅速検査が入院対象でしか保険適用が無いために、届出が患者数を直接反映しにくく、定点報告数での比較ができないとされています。



＜感染性胃腸炎＞

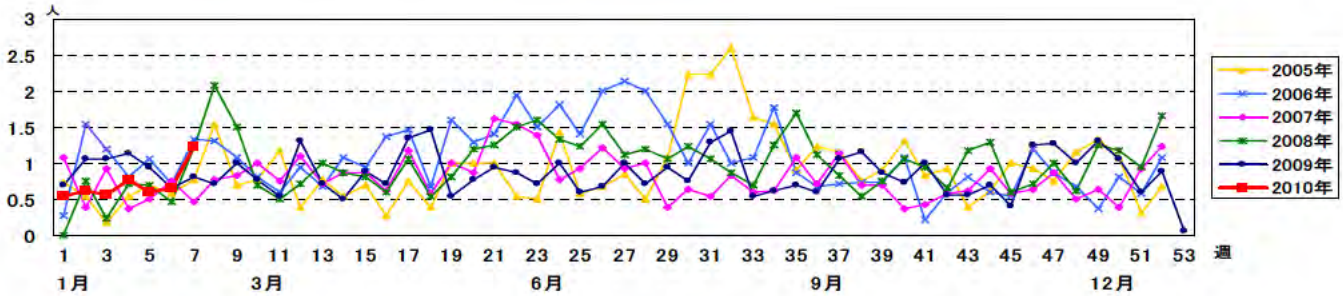
例年と異なり、今年に入り上昇が見られています。第7週では定点当たり10.81であり、行政区別では、緑区が27.50と警報域であり、泉区が17.75、神奈川区が16.50と終息基準に達していません。ノロウイルスによる学校等施設内集団感染の報告もありますので、施設管理者の注意が必要です。全国12.45、県域13.20、川崎市15.94、東京都11.55と何れも横浜市より高い値です。

＜流行性耳下腺炎＞

定点当たり0.79ですが、瀬谷区4.00と泉区3.25が注意報のレベルです。全国0.96、県域1.01、川崎市0.22、東京都0.62です。

＜流行性角結膜炎＞

定点当たり1.22ですが、瀬谷区が9.00と警報レベルです。全国0.53、県域1.11、川崎市0.86、東京都0.46です。



＜性感染症＞

性感染症は、産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。1月は、2009年12月に比べて全体としては横ばいです。性器クラミジア感染症は、男性17例、女性11例でした。性器ヘルペス感染症は男性7例、女性13例でした。尖圭コンジローマは男性6例、女性5例でした。淋菌感染症は男性8例、女性3例でした。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点：8か所、インフルエンザ（内科）定点：5か所、眼科定点：1か所、基幹（病院）定点：3か所の計17か所を設定しています。

検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

＜ウイルス検査＞

2010 年 2 月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点 52 件（鼻咽頭ぬぐい液 45 件、ふん便 7 件）、内科定点 10 件（鼻咽頭ぬぐい液）でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎 23 人、インフルエンザ 15 人、胃腸炎 8 人、RS ウイルス感染症 3 人、伝染性紅斑症 1 人、口内炎 1 人、発熱のみ 1 人、内科定点はインフルエンザ 5 人、気道炎 5 人でした。

3 月 10 日現在、小児科定点のインフルエンザ患者 13 人と気道炎患者 4 人、内科定点のインフルエンザ患者 3 人から新型インフルエンザウイルス（AH1pdm）、小児科定点の気道炎患者 1 人から RS ウイルスが分離されています。

これ以外に、PCR 検査では小児科定点の気道炎患者 4 人、胃腸炎患者 2 人、インフルエンザ患者 1 人、RS ウイルス感染症患者 1 人、口内炎患者 1 人、内科定点のインフルエンザ患者 1 人、気道炎患者 1 人から AH1pdm、小児科定点の気道炎患者 8 人、RS ウイルス感染症 3 人、インフルエンザ患者 2 人から RS ウイルス（このうち気道炎患者 3 人、RS ウイルス感染症 2 人、インフルエンザ患者からは AH1pdm も重複して検出）、胃腸炎患者 3 人からそれぞれノロウイルス G2 型、コクサッキーウイルス A6 型、アデノウイルス 41 型（AH1pdm も重複して検出）、気道炎患者 1 人からライノウイルスが検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

＜細菌検査＞

2月の感染性胃腸炎関係の受付は1件で起因菌は検出されませんでした。

大腸菌の受付は10株で腸管出血性大腸菌O157、ＶＴ1＆2が3株と腸管病原性大腸菌が1株検出されました。

溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体受付は5件でA群溶血性レンサ球菌が4件から検出されました。血清型はすべてT1でした。

百日咳の検体受付は2件で百日咳菌は検出されませんでした。

【 感染症･疫学情報課　 検査研究課　ウイルス担当 】